
金の姫君

渡邊カオリ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の姫君

【Nコード】

N2948V

【作者名】

渡邊力才リ

【あらすじ】

お姫様と騎士様の物語。

王命により王女の婿に認定されたウィリアム。将来は女王の夫…
…継ぐはずだった筆頭公爵の地位はあっさり姉へ移行。

ただの普通の近衛隊長でいたいという大望は誰にも気づかれぬまま……。

帰還（前書き）

ファンタジーですが、魔法ナシの世界です。もちろん、魔王も女神もナシ。エセ中世ヨーロッパ風の世界なのは、お姫様と騎士様が書きたかったから（笑）

亀更新でもよろしかったらお付き合いくださいませ。

帰還

薄墨に朱をたらしたような気だるい夕焼けを背に、遅しい軍馬が帰還のいななきをあげた。

「ウィリアム！」

すぐそばの厩舎《きゆうしゃ》で待ち構えていた馬丁たちより早く、ごく薄い麻を重ねた藍色のドレスがひるがえる。

ほぼ半日、駆けとおしての帰宅に気をぬいていたせいで、不意について抱きついてきた襲撃者に息を詰まらせた。危うく後ろに倒れこみそうになり、あわてて踏ん張る。

「姉上、離れてください」

あわてて頭半分ほど背の低い姉を引き剥がすが、ドレスの胸元から裾にかけてまだらに白くなりひどい有様になっている。

「半月ぶりの帰還の挨拶がそれなの？」

冴えた銀の髪に縁取られた深藍の鋭い双眸が眇められる。少なくとも機嫌はよろしかろうとの予想に反した、ドスの利いた姉の声につめたい汗が背中を落ちてゆく。御歳二十二歳、十四の頃より王国一の美女の名をほしいままにする姉の笑みは二つ下の弟にとってはひたすら恐ろしい。

「放しておあげなさい、エリザベス。慌てなくとも、しばらくはウィリアムもこちらにいるのですから」

いつの間に現れたのか、やわらかそうな金髪をゆるく結い上げた婦人は笑いを含んだ声でそう言くと、後ろに付き従ってきた侍女に湯浴みと食事の用意を命じた。

「婚儀も決まった娘がはしたないですよ？ あなたも着替えていらつしゃい。夕食後にはウィリアムも私たちに時間をとってくれるでしょう」

「も……もちろんです母上」

柔らかな笑みと言葉に押されて、ウィリアムはうなずいた。エリ

ザバスとウィリアムはは銀髪に濃い青の瞳で、顔立ちも男女こそ違えよく似ているが、淡い金髪に薄い水色の瞳のこの夫人とはまったく似ていない。年齢的にもこんな大きな子供がいる歳にも見えないが、知らなければ血縁関係すら感じられないだろう。ただ、このウィード王国の貴族に連なるもので筆頭公爵家夫妻とその子供たちを知らぬ者がいるはずもないが。

「無事に帰ってこれて何よりです」

やわらかいながらも有無を言わせぬ母親の物言いに「これからすぐ城へ」とは言えなかった息子は、汗に張り付いた手袋を慌ててはずして、差し出された母の手に口付ける。これでは何のためにわざわざ正門を通らずに厩舎に直行したのかわからない。領内の本宅ほどではないとはいえ、公爵家の決して狭くはない城屋敷（王都にある屋敷）の厩舎近く、いわば裏方に母と姉の二人が現れたのだ、これはもうてぐすね引いて待ち構えていたと見るべきだろう。

王城の鳥（前書き）

進まない、全部書き直したほうがいいのかも

王城の鳥

「姫君にはご機嫌麗しく……と、いうわけではないようだね。ふくれてどうしたの？ クリスティーナ」

夏の終わりのこの季節に、春の女神もかくやと思わせる笑みで王甥エドアルト・エルウインは王女に微笑んだ。その物言い、物腰はあくまで柔らかく優美なこの場にふさわしい。

とにかく実用的で堅牢な城のなかにあるとは思えないほど東宮は優美で洗練されている。四対の装飾的な柱のみで支える、丸みを帯びた屋根が印象的な東屋を中心とする中庭は亡き王妃の故国の様式を模した物で、二重の堀をめぐらせた厳しい城の中にあるとは思えない。

「いい訳ないでしょう」

王女は顔をしかめて、エルウインをにらみつけた。その様は蜂蜜の瞳もあいまって、威嚇する猫そのものだ。

「何が気に入らないのやら……」

対するエルウインはあくまで優美で優雅で……「男女が逆ならよかったのに」などと影で言われていることを、もちろんクリスティナは知っている。

「見目もいいし、近衛の中でも腕が立つし、なにより陛下のお気に入りで」

いらだつ王女には気づかないのか、ふりだけなのかエルウインはさらに言葉をついだ。

「キレイなものはキレイなの」

見事な金髪を逆立てかねない勢いで、クリスティーナは言った。実際は東宮にひっこんでいるクリスティーナと近衛の任で忙しくしているウィリアムとでは、キレイといえるほどの接触はない。しかし、クリスティーナにとってウィリアムはあらゆる「ままならなさ」の象徴にみえていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2948v/>

金の姫君

2011年8月6日13時27分発行